

うそつき

新潟県立村上中等教育学校 3年 小 山 茜

「嫌われたくない。」この思いがいつも私を支配していました。

私が小学四年生の頃、仲の良い二人の友人がいました。登校してから朝の会までの時間や授業の間の時間、下校時など時間があれば三人で楽しく話していました。しかし、今思えば「楽しい」と感じていたのは、私一人だったのです。

始めのうちはあまり深く考えていませんでした。一緒に下校する事を断られても「用事があるんだろう。」ぐらいにしか思っていませんでした。しかし、しばらくしてこの違和感を確信に変える出来事が起こりました。それが、クラブの選択でした。クラブは中学校でいう部活のようなものです。ある日クラブの希望をとるため、一人ずつ紙が配られました。私は友人二人とバドミントンクラブに入ろうと約束していたので第一希望には迷わずバドミントンと記入しました。第二希望は適当なものを記入しました。バドミントンは毎年希望数が少なかったため、第一希望がとおると考えていたからです。それから数日後、私は希望どおりバドミントンクラブに入ることができました。しかし、二人のクラブは違いました。二人はひたすら「なんでだろう。」をくり返していました。何かがひっかかった私は先生の机に向かいました。机上にはクラブの希望用紙。私はそれをめくり始めました。いけない事だと分かっている私でも手は止めることはできませんでした。私は二人の名前を探し、記入欄を見ました。「バドミントン」の文字はありませんでした。私はこの時、怒りより恐怖心を強く感じました。「あんなにニコニコしていたのに。あの笑顔の裏で私の事を嫌っていたのか…。」と。この瞬間から私は人から嫌われることに恐怖心を抱くようになりました。それと同時によく嘘をつくようになりました。嘘を積み重ねるうちに嘘をつくということに罪悪感を抱かなくなりました。さらには自分自身にも嘘をつくようになりました。一番酷かったのが、六年生の時にできた友人の趣味に合わせて好きでもないアイドルを好きだと自分に嘘をつき数万円近くもそのアイドルのグッズに費やしました。これには両親も呆れ顔でした。

私の嘘は誰にも気づかれない自信がありました。相手の顔色に合わせて言葉を選んで話したりしていたからです。しかし、一度だけ私の嘘が両親にばれてしまいました。その時、両親は泣いていました。何故泣いているのかあの頃の私は分からなかったけれど、悪い事をしたという事は理解できました。嘘一つで人をここまで傷つけるなんて思っていませんでした。私はこれをきっかけに罪悪感というものをまた感じられるようになりました。その夜、夢を見ました。雲のない、抜けるような晴天の日。心地好いはずなのに、何故か息が苦しい。たかが夢ですが、両親を傷つけた日に見たこの夢はどうやっても忘れられません。というよりは、忘れてはならない気がするのです。客観的に見れば関係がないように聞こえると思いますが私にとっては大切な意味をもっている夢です。

今の私は人に自分の意見を言えるようになり、嘘もだいぶ減少してきました。人から嫌われる恐怖感はまだに拭えませんが、母に尋ねると、その感情は皆が持っていると聞いて気が楽になりました。

嘘は自分が思っている以上に人を傷つけます。人を傷つけないための嘘もありますが、嘘をつきすぎると溺れていきます。

私は嘘に溺れてたくさんものを失いました。お金、両親からの信用、己の感情も失ってしまいました。私はもうこのような事をしたくないし、他の人にもしてほしくないと考えています。

最後に、嘘は自分を守る盾にもなりますが、時には人を傷つける剣にもなりうるのです。みなさんには私のようにならない為自分にも人にも正直であってほしいと思っています。